



毎月十五日発行 所 社
行 行 大 宗
像 像 像
宗 宗 宗
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
0940-62-1311(代)
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
福岡店 福岡市博多区東公園二二二(一三九八)
電話 福岡(五)六五二一一九四五(六番)
本店 京都市下京区油小路大念北入(千石)
電話 京都(三)四一三三三(一三四一)番
電話 京都(三)四一三三三(一三四一)番

「宗像」400号を迎えて

五百号への更なる 発展充実を目指し

宮司 養父 守



社報「宗像」は今月で四百号の記念すべき号を迎えた。

昭和三十四年、皇太子殿下御成婚の喜びと感激を後世に伝えるべく、養父を制度と社報発行の記念事業を企画し、昭和三十六年四月一日に創刊号を発刊して以来、歳月にして三十三年三月の時が流れた。その間四季折々の祭典、神賑行事や、造営事業、文化財関係ニュース等のほか、宗像市内郡内の出来事や変貌ぶりなど、郷土の香りを織り込みながら毎月発行、配布先も全国の氏子敬者、神社関係、更にフランス、アメリカ在の郷土出身者等、広範囲に及んでいる。

昭和六十一年七月十九日、礼宮文仁親王殿下が御参拝された。三年前の皇太子向妃御殿下御参拝に続いての光栄であった。殿下は本殿御参拝の後、神楽館に於て海の上皇院沖ノ島の祭祀神宝類を熱心に御覧になり、儀式殿で御休息の後、御出発されたが、数年後、御結婚により秋篠宮家を創設され、紀子妃殿下と共に多忙な御公務をおつとめになっているが、その英姿をテレビで拝し、感慨新たなるものがある。

この年十一月八日、公務出張中の養津宮司急逝の報は、まことに晴天の霹靂であった。養津宮司は播磨司時代、久保宮司の良き補佐役を務め、特に昭和四十四年から二年間に行われた大造営事業の中心的存在として、その卓越した手腕を振って見事にこの大事業を達成された。重文指定の迎津宮本殿の解体修理をはじめ勅使館、斎館、祈願殿の建設や、境内の拡張整備により、当大社の古い由緒と高い御神格に相応しい荘厳な神域の復興が実現した。宮司就任後も、第二宮、第三宮の御造営、神玉置、儀式殿の建設等、御神威の発揚、神社の発展に寄与された御功績は誠に多大であつたが、五十三才の若さでその生涯を終えられたことは痛惜の極みであつた。福岡市の商場で最大の盛んな葬儀には、宗像大社菊花会々員葬の大意、大社菊が玄關側に飾られ、心より哀悼の意を表した。

同年十一月十七日付で、因らざる小職が宮司を拜命し、重責に堪へるべく、養津宮司の後を継ぐこととなった。昭和六十年九月十九日、天皇陛下御登極喜慶の報は身の震えるような衝撃であり、直ちに御病室平癒の祈願祭を斎行。また境内に御病室御平癒の記帳所を設けられたが、約三万五千人の参拝者が御記帳を行った。この年の秋祭大祭は、各種の神賑行事を自粛中止したが、「みあれ祭」については、沖津宮、中津宮の御神霊を御迎へする不可欠の神事であり、執行を行うことを決定。但し全輪、大漁旗の飾付けは行わず、国旗だけを掲げ、御平癒を祈つての潔然たる海の神幸となったが、この情景はテレビで全国放映され感動的であった。

陛下は医事関係者も驚嘆する程の強靱な御氣力と御体力で幾度となく大きな危機を乗り越えられ、国民の

熱帯の中で越年おそはされた。曾てない重苦しい空気の中で迎えた新年であったが、六十四年という史上最大の昭和の暮明けを祝う時代、一月七日早晩、突然崩御の悲報に接し、只々悲憤哀嘆の極みであった。

昭和天皇は、激動と試練の昭和の時代を、国民と共に歩かれ苦業を共にされた。結は、陛下の強い御意志と権威により、世界史に例を見ない一糸乱れぬ統制の下で実現し、わが国を滅亡と分断の危機から救つていただいたのである。そして、その御存在は、戦後の日本の社会にはかり知れない統一と安定を与え、祖国再建の原動力、精神的支柱となつた。更に歴史的、文化的にもその連続性を断絶することなく、日本の文化や伝統を確実に維持発展させることができたのである。

二月二十四日、東京新橋御死に於て大喪の礼が行われ、当社でも同日同時に清明殿に氏子敬者、町民が参集して送葬式を執り行い、御在世中の御聖徳を偲び、偉大な御聖業を讃へ、長期計画の第二歩を刻んだ。画期的な資料集としてその評価も高い。

先帝崩御の悲しみのうちに、皇位の空白は一刻も許されず、皇太子明仁親王殿下に直ちに踐祚あらせられて皇位を継承され、元号も平成に改まった。

喪も明け平成二年十一月十三日、今上陛下御即位の礼が、皇居に於て古式に則り厳肅、盛大に行われ、当社でも当日、本殿に於て氏子敬者多数参列の下、御即位を寿ぎ大御代のの弥栄と、皇室の御安泰を祈念して奉祝大祭を斎行した。更に御即位の日に続き十一月二十二日、十三日

の両日に亘り、皇居東御苑内に特設された大嘗宮に於て、古儀に則り大嘗祭が荘

厳に執り行われたが、当社社に於ても臨時大祭を厳肅に斎行した。この平成の御大典奉祝記念事業として、授与所の新築、記念碑建立、大蔵八旗の新調、警備三基の修復等を行ったが、昭和から平成へ、大きな時代の節目の時期を、重要な祭典奉仕により体験したことは感銘深い思い出となった。

待ち望まれていた皇太子殿下の御成婚が、昨年六月九日、宮中賢所で古式豊かに執り行われ、当社でもこの御慶事を祝つて、奉告祭並びに境内に御成婚奉祝記念植樹を行った。

文化財保存管理の面でも特筆すべきことが多かった。重文指定の四百四十五巻に及ぶ色紙法書「筆一」の切修の修理事業が、他に例を見ない二十五年間の歳月を経て完了した。また十二万点に及ぶ沖ノ島祭祀神玉庫の修復作業が、東京国立博物館に於て永年に亘り施されたが、昨夏、漸く終了した。更に、重文指定の宗像文書八巻を中心とする当大社の中世書物纂事も着々と進められていたが、昨年、「宗像大社文書・第一巻」として刊行された。長期計画の第二歩を刻んだ。画期的な資料集としてその評価も高い。

四百号を迎え感慨無量なるものがあるが、永い年月の間、常に情報発信の役割を果たし続けてきた達成感の思いも深い。

歴代の編集スタッフ、原稿担当職員の方、また有限会社大和印刷所の御協力に感謝し、五百号への更なる発展充実を目指して全職員一丸となって邁進を期す次第である。

次第である。

第三九四回 宗像大社歌会詠草

中村 吾郎 選
毎月末日メ切

大島 目原 節子
大時化の鳥をめぐれば三千の鳩は暗き入江を埋む
(註) 入江の難を逃れるように、時に上つては鳴る。その姿がすさまじいばかりに目に見ゆる。音も響く。

名古屋 小田 留子
関欠の噴水止みし向う側遠足の子等歩みゆきたり
(註) 歌の内容説明が無いので自ら一首に張りを持つ。

大島 屋形とみえ
無縁仏の供所に寄りて舞ひ合ふ鴉の群に冷雨降りつく
(註) 事実だけを単純化して述べたところから詩は生まれた。説明も主観的にもい深よさに注目。

田熊 鷲頭かつ代
遠足の列の中よりいち早く我に手を振る幼な孫は
日の里 後藤 君代
三百年のみどり延べたる五葉松庭園にあふきが見る

大島 越智 治子
うらの海沿岸近くは船舳ひ雲丹採る漁師の潜りすばやし
城南ヶ丘 中間日出子
春空に群に外れし鳥一羽一目散に羽ばたきて去る

福岡 池浦千鶴子
薬とんび着て兼社丹附へがたき冬を耐へをり顔紅くして
福岡東 桜井 ツ子
八十六年のわが来し方を思ふにも哀歎ともに今は茫たり
吉留 高山 信子
土深く掘りて竹の根起しゆき整えし畑も今は木阿彌

武丸 中村さつき
境内に紅梅白梅連速あり二月の水雨に濡れて咲き継ぐ

大島 河野 英子
餅む娘のため進水の祝ひ餅拾はむと急ぐ木枯らしの中
福岡東 清原 絹代
参道に立つや忽ち流れ来る梅ヶ枝餅の匂い芳ばし
土穴 瀧口 敦子
溝開の椿に葉巻の音々々し朝光の中
赤間ヶ丘 松本 澄子
川へだつ山の斜面に梅の花霧の動けば白く浮き見ゆ
原町 八波 五月
紅梅の花芽ふくらむ此の朝を冬の名残の散たばしる
津屋崎 佐々木和彦
枯草に反りて止まれる羽毛ありいつか無くしし夢のごとくに

名古屋 小田 喜一
閉山の日は遠くつて会い難き人等偲びつづ想い果てなし
自由ヶ丘 津江富美子
風強み水雨降りく路切に通過電車降り立ちて待つ
福岡 本松 宣子
梅咲けど気紛れに来る寒気団肌刺す風に襟立てて行く

福岡 山口よし子
河草地蔵高塔山の公園に背中を釘にうたれ鎖まる
自由ヶ丘 細川 絹子
風通る広き寺地に咲き盛る椿の紅の匂ふが如し
池田 小田しめゆ
肥後すみれ揃う花びら揺らざおり寒の戻りの風にかか

大島 杉田 禮子
日を選びて物おす我を笑いつつ夫がいつしか日めくりを持つ
吉留 白きうめの
子には子の生活があり高き道を走れる車たち



宗像四百号の歩み

昭和から平成へ十年の記録

昭和三十六年一月、宗像第一号が発刊された。三十三年と三ヶ月間の初春であった。今月号が、第四百号である。職員手造りの社報で、大社四季折々の姿と神郡宗像の香りを載せて編集し、毎月六十部を全国神社界、崇敬者に配布してきた。

昭和四十四年四月号に百号を記し、昭和五十二年、八月号で二百号を迎えた。当時の宮司岡津嘉志之氏の挨拶文を見ると、昭和三十六年当時、この「宗像」を発刊するに当り、大変苦労された事がうかがえる。又この十年間は、大社昭和の御造営大業で大変な歳月であった。昭和六十一年十二月で、宗像は三日を迎えた。昭和の大造営が終り、神玉館、儀式殿も新設され、境内の樹々も歳々に緑濃く参拝者の姿にも思いやすさを感じての月日であった。あれから十年、今平成六年四月に四百号を迎え振り返る時、大社にとっても激動の十年であったと云える。この百号の足跡を今、に年代順に回顧してみたい。



(昭和61年)

この昭和六十一年は、宗像市郡内の変貌の年であった。前年(61・9)福岡県立津屋崎高等学校が完成し、津屋崎町の渡入江近くに移動した。又この十年間には津屋崎町役場新庁舎が完成し、前面県道がカマメリヤ通りと呼ばれ町花椿が植樹された。



(平成元年)

新年を迎えた喜びの中にも一抹の不安が国民に広がっている。今上陛下の御容体が心配なのである。一月七日、午前六時三十分、崩御の悲報が全世界に流れた。激動の「昭和」の歴史が幕を閉じ、年号も平成と改元された。

一月十四日、昭和天皇「厳葬の儀」が小雨降る中に執り行われ、国民は、思い出深い昭和天皇に捧げる涙を以て「アジア太平洋」を福開市道(の浜)に開いた。メイン会場には宗像大社御神楽が展示され多くの人々の目を惹いた。

八月の真夏の太陽輝く大沖ノ島、沖津宮社務所の大修復工事が完了した。

昭和天皇の忌も明け、新春に祈る初日も一段と輝く御大典、大嘗祭を待つ年である。平成の御大典を奉祝する記念事業が始まった。当大社でも、二月五日本殿授与所新築工事が始まり、九月には大鏡箱奉納、長崎市・上田一子氏、折原殿大鼓奉納、三葉県・秋山幸衛氏、等崇敬者の奉納が多かった。

そうした中、四月二十九日、昭和天皇の御聖徳を偲びつ、第一回の「昭和祭」が厳粛に実行され、この時第三十一期「宗像大社奨学金」受給生二十名に選定書が授与された。

十一月、「平成の御大典」奉祝記念事業は続き、秋季大祭用重宝三基の修復並びに調度品の新調、大幡八旗の新調と奉納が続いた。

十二月、宗像大社御神楽が展示され多くの人々の目を惹いた。

この年は当大社大激動の年であった。一月宮中歌会始に養父峰子(宮司夫人)さんが一度目の入選をはたされ喜びの中の年明けであった。八月十五日には、礼宮文仁親王殿の御参拝があり神郡あげて奉迎した。

十一月九日午前十一時五十分、津屋崎宮司の急逝の訃報は神郡内を深い悲しみに陥れた。享年五十三才。

十一月一日午後、時より、宗像大社・宗像大社氏子会の合同葬が福岡市・積善社福岡斎場にて行われた。

十一月十八日、後任宮司に宗像守守宣が昇任された。年の初めは境内に明け暮れは悲しみの内にこの年を送ったのである。

四月二十四日、宗像市総合市民センター「宗像エリック」が竣工落成した。明るい話題の中、今上陛下(昭和天皇)のご健康がすぐれず、九月十九日には今上陛下御病室を参拝願が実行され、境内には御見舞が記帳所が置かれ、参拝者は一様に陛下の御平癒を祈念した。

又、鹿児島県海老津、赤間駅間に「教育大前駅」が新設されたものこの年三月十二日である。

昭和天皇の忌も明け、新春に祈る初日も一段と輝く御大典、大嘗祭を待つ年である。平成の御大典を奉祝する記念事業が始まった。当大社でも、二月五日本殿授与所新築工事が始まり、九月には大鏡箱奉納、長崎市・上田一子氏、折原殿大鼓奉納、三葉県・秋山幸衛氏、等崇敬者の奉納が多かった。

そうした中、四月二十九日、昭和天皇の御聖徳を偲びつ、第一回の「昭和祭」が厳粛に実行され、この時第三十一期「宗像大社奨学金」受給生二十名に選定書が授与された。

十一月、「平成の御大典」奉祝記念事業は続き、秋季大祭用重宝三基の修復並びに調度品の新調、大幡八旗の新調と奉納が続いた。

十二月、宗像大社御神楽が展示され多くの人々の目を惹いた。

八月の真夏の太陽輝く大沖ノ島、沖津宮社務所の大修復工事が完了した。



(平成三年)

皇太子殿下の御結婚ムードが、ニュースとなり、ほのぼのとした気配が感じられる年明けであった。

若葉の六月十七日、当杜勅使館に於て平成三年度神道国際友好会幹事会が開催された。又九月には沖ノ島における大工事完成した。

住人は大社神職一人と云う。昭和天皇の御聖徳を偲びつ、第一回の「昭和祭」が厳粛に実行され、この時第三十一期「宗像大社奨学金」受給生二十名に選定書が授与された。

十一月、「平成の御大典」奉祝記念事業は続き、秋季大祭用重宝三基の修復並びに調度品の新調、大幡八旗の新調と奉納が続いた。

十二月、宗像大社御神楽が展示され多くの人々の目を惹いた。

工事に合せ、海浜より神殿に至る約四百五十枚の石段の修復を見た。これらの工事を完了したのである。又同月、重要文化財の色定法師一筆、一切経の修復が完了した。四半世紀をかけた四千三百二十巻の経文修復であった。総額一億円と云う大修理は、今、目事に完了した。

しかしこの内外共に激動異変の年であった。台風十七号、十九号が全国各地に大きな被害をもたらした。又、超大国の連年の崩壊、イラク湾岸戦争、島原半島岳の二百年ぶり火山再噴火活動等々暗いニュースの多い年の瀬であった。

昨年(平成四年)の台風十七号、十九号は大社境内にも大きな被害をこうした。正面参道第二鳥居前大鏡が崩壊したのもこの害による。

四月五日、若葉の中、三葉建設機工(株)社長日井久仁生氏よりこの再建奉納をいただいた。

三葉建設機工(株)は、沖ノ島港湾工事の関係で、この島港湾に島諸事、に御協力いただき、又鳥居の御神水井戸再建工事も奉納いただいている篤意である。

五月二日、五日、第六十一回伊勢神宮式年遷宮が執り行われた。

十一月十七日、宗像大社第十八代、宗像大宮司宗像貞貞公の室室、顕彰碑の建立が竣工した。四塚連山湯川山の麓、玄海町の南の空の玄間として大いに活動の城(墓所)を保護保存し氏貞公の功績を顕彰しようと建設された宝室である。

五月十九年五月、「宗像大社関係文書を学術的且つ系統的に集大成し、逐次刊行することにより大社の由緒を明らかにし、更に貴重書を永久に保存し、且つ積極的に活用するため複製を製作し、汎く神社界等には関係学界の進進に寄与すると共に宗像大神の御神徳を揚することを目的とする」趣旨の下、宗像大社文書複製刊行委員会が組織された。

六月九日、全国民育し、待ち望んだ「日嗣の皇子」御誕生を祝う日である。皇太子殿下、雅子妃殿下の御結婚の儀が、宮中賢所大前で厳しく式式ゆかしく

執行行われた。当大社でも二百余名の参列の下、厳粛に奉祝御成婚奉告祭が実行された。筑前大島中津宮に於ても盛大な奉祝祭、稚児行列、子供御舞等を行い全島民が祝福申し上げた。

九月、沖ノ島の神玉館の修復が完了し、全て神玉館へ返納された。ここで昭和五十六年から始まった「沖ノ島祭祀遺跡出土品修理事業」が終わったわけである。作業は東京国立博物館に委託して行ってきたが、考古学者発掘調査による出土品の修理修復の作業として、これも日本で最長の修理事業であった。

全てが国宝であり重要文化財である十三万点は、民族の至宝として末永く後世に保存継承されることとなった。

十月二日、五日、第六十一回伊勢神宮式年遷宮が執り行われた。

十一月十七日、宗像大社第十八代、宗像大宮司宗像貞貞公の室室、顕彰碑の建立が竣工した。四塚連山湯川山の麓、玄海町の南の空の玄間として大いに活動の城(墓所)を保護保存し氏貞公の功績を顕彰しようと建設された宝室である。

一話(33) 伽倻を訪ねて(六)

樂 杏子

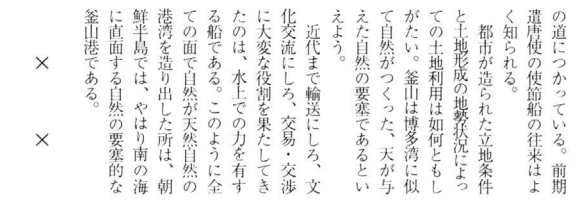
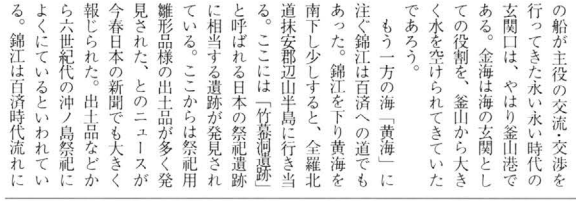
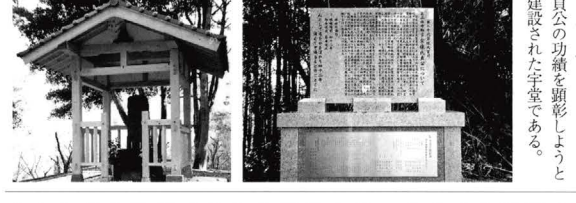
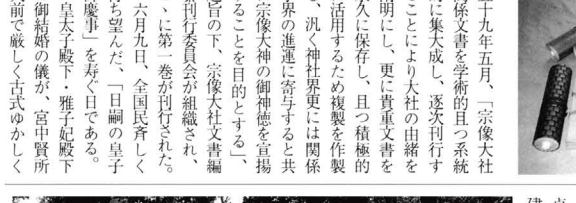
韓国第二の都市であり海沿って都邑がくられ、公州抹餘と巨濟滅亡まで二〇〇年に亘り運河の役目をしてきたのである。

伽倻遺跡から滑石製の雛形品(剣・刀・鏡・短冊・玉)が多く出土しているが、祭壇や祭場らしき祭祀遺構の確認はまだ未報であるが、日本の島の祭りで有名な沖ノ島・大飛鳥・神島などと同様に、この半島の先端が航路標識の役割をはたしてきたのであろうし、地理的状況が博多港の志賀島、岡ノ島の高島、佐賀原の呼子港と同じように、公海に突出した海と陸との間の門柱の感じである。

一方、大河洛東江を間にして北西側の河津には釜山が、その河口には釜山港もたらず土砂の堆積によって河口に造られてきた街である。今は韓国の南の空の玄間として大いに活動の城(墓所)を保護保存し氏貞公の功績を顕彰しようと建設された宝室である。

都市が造られた立地条件と土地形成の地勢状況によっての土地利用は如何ともしがたない。釜山は博多湾に似て自然がつくった、天が与えた自然の要塞であるといえよう。

近代まで輸送にしろ、文化交流にしろ、交易・交通の大変な役割を果たしてきたのは、水上での力を有する船である。このように全ての面で自然が天然の港湾を造り出したのは、朝鮮半島では、やはり南の海に直面する自然の要塞的な釜山港である。



春季大祭齋行

桜前線が近づき境内のつぼみも目立って開花しつつある。神苑にて三月三十一日から三日間に亘り、当大社春季大祭が斎行された。



大祭が斎行された。祭典に先立ち、三月二十一日、午後五時より九日地元祝ならびに協力会々員多数の奉仕により職

(御案内) 第4回 宗像大社氏子会 研修旅行

宗像大社氏子の皆様へ
平成6年度、宗像大社氏子会研修旅行を下記の日程により「當大社御祭神(田心姫命・満津姫命・市杵島姫命)を主祭神として祀る厳島神社(旧宮幣中社)」と「武具、刀剣をはじめ各種文化財を多数収蔵する大山祇神社(旧国幣大社)」への正式参拝を趣旨として広島、岡山、瀬戸内地方の研修旅行を企画致しました。
皆様におかれましては諸事ご多端、出費ご多用の節とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご参加賜りますようご案内申し上げます。

宗像大社氏子会々長 出光 太蔵

〈附記〉
親睦の意も併せて行いますので、宗像市郡内にお住まいの方であれば何方様でもご参加できます。ご夫婦同伴を歓迎します。

いつくしま おおやまつみ 厳島神社、大山祇神社参拝と 瀬戸内の名勝旧跡を訪ねて

出発日 6月7日(火) 2泊3日
締切日 5月16日(月)
募集人員 130名
会費 45,000円
申込先 宗像大社氏子会事務局
☎ 0940-62-1311

〈コース〉

6/7	宗像各地(8:00)——最寄IC——めかりPA——下松SA——廿日市IC——宮島口——宮島(昼食・厳島神社昇殿特別参拝・千畳閣など散策)——宮島口——廿日市IC——広島JCT——河内IC——竹原——広島の奥座敷・湯坂温泉(泊) 16:00
6/8	ホテル(8:00)——竹原——忠海港——国宝の島・大三島(大山祇神社昇殿特別参拝)・宝物館(歴史を物語る宝物の数々)——生口島——西の日光(耕三寺・昼食)——生口大橋——因島大橋——尾道大橋——尾道IC——山陽自動車道——倉敷JCT——児島IC——瀬戸大橋を望む・鷺羽山(泊) 17:00頃
6/9	ホテル(8:30)——児島IC——倉敷IC——倉敷(大原美術館・美観地区)——岡山・後楽園(日本三大名園)——最上稲荷(昼食)——総社IC——山口JCT——檀之浦PA——若宮IC——18:30頃・宗像各地

立て、注連縄の新調、各所へ紫菀、紫陽花等の諸準備が行われた。
三月二十一日、午後五時経社地祭、同六時からは宵宮祭夕暮の中執行。明日からの大祭が無事斎行されるよう敬慶な祈りが捧げられ、その夜全神職は参籠に入った。
四月一日、あいにく早朝より雲が広がる小雨の中、定刻午前十一時、兼父宮司以下神職、氏子奉幣使、又養護の冠、萌黄色の装束の上には木を佩いた風俗奉仕者、土庫の衣装を着けた浦安舞臺仕の乙女達、地元総代等が太鼓の合図により参進し、厳告にて修職。続いて本殿へ進み、春季大祭第一日祭を斎行。拜殿所定の座に着座。宮司一拜に始まり、舞臺の調べが流れる中、宮司が祇座に着座。献饗、幣帛供進のあと、兼父宮司の国家鎮護、皇室安泰を祈念する祝詞奏上に続き、宗像大社氏子を代表して井上清氏(宗像市)が奉幣詞を、やうやく奏上した。

布敷上に際し、厳冬の玄海に瀧て若布を採取された奉仕者に対し、当大社兼父宮司より、感謝状と記念品が一人一人に手渡された。
総社祭後、新鮮やかと高良、第一宮、第二宮・宗像護国神社、又本殿にて交通安全講話が各々斎行された。
宗像護国神社奉春大祭には、宗像市、郡の遺族者百数十名、市長長や同議会議長、当大社総代等多数が参列。護国の英霊を慰め、遺族会、郡民の幸福と弥栄が祈念された。
又午後、時より、春の日の差しがより、本殿に於て、南坊流小方社中による献茶祭が行われ、平素から熱心に茶道を学んだ当社巫女が南坊流の稚紗のさばきを披露し、香しい濃茶が神前に献げられた。
尚、神賑行事として、四月三日早朝より奉納剣道大会、奉納吟詠大会が行われ見事に咲き誇る桜花の中、少年剣士等が日頃修練した技を競い合い、列席の掛け



声が終日神域にこだまし、神人和楽の伝統の下、大祭に二層花を添えた。かくして春季大祭は、草木の芽生えが萌生する季節につきいなが、人々は春のひと時を楽しんだ。
尚、感謝状及び記念品授与者は次の通り。
大島漁協 藤島登志男
鐘崎漁協 白石 光夫
神湊漁協 榎田 徹
吉野 信治
津屋崎漁協 松井 吉彦
福間漁協 菊池 喜市
地ノ島漁協 田畑 辰馬
山下 忠

〔宗像氏貞公宇室・顕彰碑建設記〕(4) 知られざる歴史 忘れられた宗像の黄門さま

「大師は弘法に奪われ、黄門は水戸に奪われ」といふことばがある。お大師さまといふのは、通帯、弘法大師をさし、お大師さま、お大師さまとあがめ奉り、南無大師遍照金剛と唱えお大師さまと尊ぶ。弘法大師空海の代名詞としてである。
所が、大師には弘法大師がおられ、円覚大師、無相大師、承陽大師等々、まだまだ幾人もの大師の称号を賜られている方はいる。しかし、これらの方々は一般的にはお大師さまとはあわない。単に最澄とか、達摩さんとか、関山とか、道元といった呼び方をする。だから大師という称は使わない。「弘法に奪われ」といわれるのも当然である。かといって、黄門さまと黄門さまといふのは、黄門とは中納言という官位の中国式の呼び方なのである。はじめ中国の宮中の御門、小門が黄色にぬられたところから、中納言を黄門といふ所から出来た称号が官位として日本に伝えられたものである。伝えられた方は沢山の朝臣に承継された。その一人が水戸光圀公である。
宗像氏貞公も先代々々の中納言の称号を用い、朝廷の名を認し、中納言朝臣と名づけた。即ち、れっきとした黄門さまなのである。事実、昔の承福寺の寺

これは、やはりこの宗像家のそのもの官位と権勢を京都で示したのであることが伺われる。
今でこそ宗像家は断絶し、そのおかげを見ることは出来ない。だが、昔より京都御所の広大な敷地の一角に千坪に及ぶ宗像神社の社域の森があり、大きな本殿の書物「大鏡」の中にこの宗像の神は朝廷の二尊崇も驚かしておはしましたと記されている。それから見ても宗像のご神徳と共に本社の宗像大宮司の名は宮中でも少なからず高く評讃され遇されてきたことであろう。その想像は難しくもない。また往時は宗像家は九州の一大宗族といふことばを名く、公家として朝廷の名を、また前將軍足利義昭公は氏貞に助勢したのんできているほど、中央政界にも宗像氏貞の名は通っていた。これを物語つてきた。これこそ黄門氏貞公の地位と権勢を示したものであろう。

- 三月十一日 宗像大社 役員会
- 三月十二日 宗像大社 役員会
- 三月十三日 宗像大社 役員会
- 三月十四日 宗像大社 役員会
- 三月十五日 宗像大社 役員会
- 三月十六日 宗像大社 役員会
- 三月十七日 宗像大社 役員会
- 三月十八日 宗像大社 役員会
- 三月十九日 宗像大社 役員会
- 三月二十日 宗像大社 役員会
- 三月二十一日 宗像大社 役員会
- 三月二十二日 宗像大社 役員会
- 三月二十三日 宗像大社 役員会
- 三月二十四日 宗像大社 役員会
- 三月二十五日 宗像大社 役員会
- 三月二十六日 宗像大社 役員会
- 三月二十七日 宗像大社 役員会
- 三月二十八日 宗像大社 役員会
- 三月二十九日 宗像大社 役員会
- 三月三十日 宗像大社 役員会
- 三月三十一日 宗像大社 役員会

社務日誌抄

- 三月十日 月次祭
- 三月十一日 九州地区国立大学事務局長会一行(〇名参拝)
- 三月十四日 萩村産業株式会社参拝
- 三月十五日 天真如教苑一行参拝
- 三月十八日 福岡県指導農業者会参拝
- 三月十九日 安部凡吉氏外二名参拝
- 三月二十日 岡山県宗像氏子会総代児玉太郎氏外三十七名参拝
- 三月二十一日 愛媛県広見町同文化財委員会並松の森鎮座大本神社宮司大野直統氏参拝
- 三月二十二日 津村健治郎氏外一名来社
- 三月二十三日 外二名来社
- 三月二十四日 外二名来社
- 三月二十五日 外二名来社
- 三月二十六日 外二名来社
- 三月二十七日 外二名来社
- 三月二十八日 外二名来社
- 三月二十九日 外二名来社
- 三月三十日 外二名来社
- 三月三十一日 外二名来社

宗像大社歌会
俳句作品集(三七三)

参拝
ひかりヶ丘 南 万里
鳴や通字子らの変声期

藤 沢 井上 友洋
莫慮敷きて眠るがごとく春
の海

福岡中央 力丸 玄風
病癒え生々強みのつきし
春

福岡二宮 末子
すみれ咲き土葎の袴に風香
る

田熊 力丸 一郎
長寿眉よりこりと日向
はこ

日守 花田いつ枝
子約米届くチャイムや受難
節

自由ヶ丘 細川 綱子
福額の蓮華にみる寺の春
節

若松 井出 清隆
植えて名を忘れ茶花万愚
節

福岡 高橋辰太郎
車椅子老人ホームの花見か
な



(続)
対馬の奇物

対馬へ

いししいただし

離島巡りがつづいている。対馬には数年前に福岡郷土史会のメンバーで行ったのが、今回は福岡市史編纂室の七名で渡った。案内は前回と同じ中村正夫大分大学教授。前回は船であったが、今回は往復共に飛行機を利用した。飛行機だと僅か四十

分、木当りひとつとびである。三月十四日、九時三十分福岡空港発。懐いYSII機である。空港より対馬舞子と、福岡西区あたりに、あつと、間に伊都国の海岸、そして鏡山と虹の松原の未開の海が見える。眼下に一支

宿泊地の厳原の温泉へ。運動は福岡市史編纂室の大上宏氏である。対馬での二日間には厳しい地形を各運転手のお陰で計画したところ

墓地は小高い山中腹にある(実際は丘陵程度)。周辺は竹林を中心として雑木林となつていて、以前来た時には荒れていて、今

対馬歴史民俗資料館、対馬郷土館を見学。両館は同じ敷地であり、資料内容は同じようなものである。展示されているのが分

対馬の灯台は、強風を直接受けて、立っておられない。下の岩礁や海中の灯台周辺は激浪に真白

先月号でも述べていたように、沖ノ島における祭りは「四つの型」に大きく形態分類がなされる。この島の祭場は、二十三ヶ所を目的にすることが出来る。早い頃か特別に続けられている

祭りの時期は、四世紀から十世紀初頭までの約六〇〇年に亘っている。この時期は畿内の豪族による丁度、大和朝廷の日本統一から律令国家としての古代日本の完成期であるといえよう。このことは永年に亘る沖ノ島祭祀に

全国各地の古代における祭祀の址といわれる「遺跡」からは、滑石製の雛形品(いまの神道祭祀でいう模造品のこと)や、手掘式土器(現代社会で栄に採掘されている土器の出土が主力である)など、祭祀遺跡として調査されてきているのが、調査されている時期である。祭祀のもの



厳原・玄蘇の墓地を測量する

この案内の長崎先生も来られ一緒に昼食。まず僧侶・景観玄蘇(けいげん)の墓へ。玄蘇は宗氏のものと外交僧として、日朝関係にあつた人物である。もう少し記すと、玄蘇は

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

宗像むかしばなし
捨子禁制と勝浦村の大庄屋

捨子禁制の令は早くから布かれて、細民の産子を養育し、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

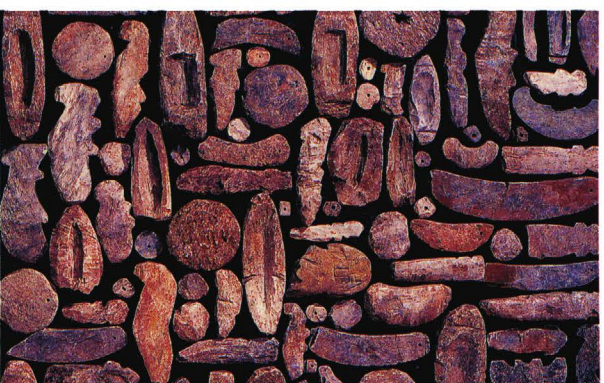
大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり

大分 少彦名の子は、父の志を継ぎ、更にその子、半五郎も父の志を継いで、親子三代にわたって、捨子救済に一生を捧げたのである。勝浦村は宗像北郷にあり



豆飯崎灯台にて



- 1、青銅鏡(内行花文鏡・方格規矩鏡・三角縁神獣鏡)
- 2、鉄鏡
- 3、武器・武具(劍・刀・矛・石突・鎌・靱・衝角付冑・冑甲)
- 4、武器・武具(劍・刀・矛・石突・鎌・靱・衝角付冑・冑甲)
- 5、工具(刀子・斲手刀子)
- 6、馬具(鞍歩挿付雲珠・杏葉・帶金具・辻金具・轡)
- 7、容器(唐三彩長頸壺・ガラス製カッタグラス・奈良三彩小壺・唐銅盤・銅製鏡・銅製皿・土師器・須恵器)
- 8、金銅製品(龍頭・香炉・状品)
- 9、滑石製形類(人形・鏡・丸鏡・変形文鏡など)
- 10、金属製形類(人形・舟形)
- 11、雛形滑石製品(儀鏡・大形勾玉・有孔円板・白玉・玉類・剣形品・斧形品)
- 12、雛形金銅製品(織機・紡織具・五弦琴・儀鏡・盾状器・高杯・長頸壺・盃・皿・用具)

(松)